

日本語における主観性の習得

—言い切りの「た」を通して—

石井 佐智子

要 約

認知言語学の立場から、事態の把握は言語により異なると指摘され、日本語は主観的に事態を把握する言語であるといわれている。日本語の主観性については日本語学の立場からも指摘されており、日本語の根幹をなすとも言える要素であるとも考えられる。しかし、日本語非母語話者における日本語の主観的な事態把握に着目した研究は管見の限りなされてはいない。そこで、本研究では言い切りの「た」を取りあげ、これを通して日本語非母語話者における主観的な事態把握について調査を行った。

【キーワード】

認知言語学、主観性、事態把握、言い切りの「た」、中国語母語話者、韓国語母語話者

1. はじめに

認知言語学の分野では、各言語によって事態の把握が異なるとされている（池上2000、2006、河上1986）。池上（2006）によると、事態の把握とは話者がある事態をどう捉えるか、そのどの部分に焦点をあてるかであり、「認知言語学の基本的な概念の1つ」である。この事態の把握は、同じ出来事であっても認知的な操作によってどの部分に焦点をあてるによって決まり、その操作は言語によって異なるとされる。例えば、日本語では「彼は交通事故で死んだ」とされるところが、英語では“He was killed in the traffic accident.”と表されるといった具合である。

また、事態の把握は言語の特徴を表すものであり、道に迷ったという場面においても日本語では「ここはどうか」のように話者自らが原点になりやすいのに対し、英語では“Where am I?”のように話者自体が客体化されやすい。このような点から日本語は主観性が強く、それを好む傾向にあるのに対して、英語は客観性が強い言語である（池上2000、2006）とされている。

主観性という用語であるが、その概念については様々な論があり、池上（2003、2004）でも諸説について論じられている。ここではひとまず「ある事態を表現しようとする際には、自らがその事態の内に臨場し、それを直接体験しているという姿勢で把握しようとする」（池上2006：26）こととしておく。

日本語における主観性は、森田（2002、2006）をはじめ日本語学の立場からも論じられており、ここでも日本語の特徴であると報告されている。

このように主観的な事態把握は日本語の根幹をなすとも言えるものであるが、日本語学習者がどのように

事態を把握しているかという点に着目した研究は管見の限り見られない。事態の把握は、その言語で好まれる表現、その言語らしさを生み出す要素でもであると考えられる。森田（2006）も述べているように事態把握が異なると、一見、非文ではないが、日本語母語話者からすると、すわりが悪い表現となる。そして、こうした壁は、日本語学習の成功者ともいえる日本語上・超級者にも立ちちはだかっているようである。

日本語における主観的な事態の把握は、人称、指示語、省略、時制表現等、様々の要素で見られると報告されている（池上2000、森田2002）が、ここではいわゆる時制表現に着目することにする。時制表現にもいくつかあるが、今回は言い切りの「た」をとりあげる。

これは言い切りの「た」が、初級でも早い段階から導入されるが、日本語教材を見る限り、着目されるのは活用形であり、どのように使うかという点では「過去・完了」とのみみされていることが少なくないからである。

2. 先行研究

言い切りの「た」は主に国語学の立場から、長年にわたって意味分析が行われている（三上1952、鈴木1962、尾上1982、寺村1984）。しかし、先行研究では話者が事態をどのように捉えているときに用いられるかという点が十分に考慮されているとはいえない。

しかし、近年ではどんな事態で「た」を用いるのか、つまり話者が事態をどのように把握、解釈しているときに用いるか、について論じた研究（松田1998、井上2001）が見られる。

松田（1998）は、眼前状況に着目し、「ル」「夕」の

使い分けは事態の解釈による違いだとし、「夕」は「(学校に行っていると思っていた娘が家にいるのを見つけて) あら、いたの?」のように、現在の状況であっても過去時への振り返り意識が顕著になる際には用いられるとしている。しかし、振り返り意識が働かないような思いがけない事件が出現した場合には用いられないと報告している。

また、小澤・藩(2006)は「夕」は英語のように客観的な時間軸に沿った過去・完了を示すのではなく、話者が主観的に過去の事態を想起しているときに用いるとしている。こう捉えることで「よし、買った」や「退いた、退いた」という過去の時間軸にない表現も説明ができるとしている。

3. 研究目的・研究課題

以上を踏まえて、本研究では日本語非母語話者が日本語の主観的な時間軸をどのように捉えているかを明らかにすることを目的とする。そのために以下の研究課題を設定した。

研究課題1：日本語母語話者と日本語非母語話者との時間軸が異なるか。

研究課題2：日本語非母語話者の母語により時間軸は異なるか。

4. 研究方法

日本語母語話者(以下JS)、中国語母語話者(以下CS)、韓国語母語話者(以下KS)を調査対象とし、調査を行う。日本語非母語話者の母語を中国語と韓国語としたのは、日本語学習者にはCS、KSが多く、言い切りの「た」と類似点があるものの相違点が多いとされる中国語「了」、相違点があるものの言い切りの「た」と大変類似しているとされる韓国語「았/었다」との対照研究(伊藤1990、井上2001a、b、塚本1990)も多いためである。そして、本研究の対象者であるCS、KSは東京近郊の文系大学、大学院に在学する者に限定した。

データ収集にあたっては質問紙を作成し、配布した。事態の把握を観察するために、問題はすべて文脈のあるもので構成した。各問題で1つずつ括弧を設け、括弧内に最も適当な言葉を4択の中から選択させる形式をとった。なお、質問紙の調査文は調査者本人が作成し、質問紙の4択は「する、している、した、していた」から構成した。会話形式の問題であるため、話し言葉を基調とし「している」を「してる」、「していた」を「してた」と表記した。質問紙の例は以下の通りである。

質問紙例

あなたが友達と道を歩いていると…
友達：ちょっと、ネコがいるよ。 あなた：うん。でもこのネコ全然動かないね。 様子もおかしいし、()んじゃない?
(a)死ぬ (b)死んでる (c)死んだ (d)死んでた

そして、回収できたJS80名、CS50名、KS47名のデータはカイ二乗検定を用いて分析を行った。

5. 結果と分析

本研究で分析したのは以下の3問である。

質問紙：分析問題

(問題1) ドイツ留学のためにドイツ語の試験を受けた友達に… あなた：試験どうだった? 友達：全然できなかった。半分も書けなかったよ。 あなた：結果はこれから出るんだし、あんまり落ち込まないでよ。 友達：でも、60点以上とらないと、この試験は不合格だから。 はあ…。ドイツ留学のチャンス、()よ。
(a)逃す (b)逃してる (c)逃した (d)逃してた
(問題2) あなたは、友達と2人で先輩を待っています。 あなた：先輩、ちょっと遅くない? 友達：うん。映画、始まっちゃうよ。 あなた：あつ、()。 先輩！早く、早く！映画、始まっちゃいます。
(a)来る (b)来てる (c)来た (d)来てた
(問題3) あなたが道を歩いていると、虫のようなものが飛んできて… あなた：何か目に()。
(a)入る (b)入ってる (c)入った (d)入ってた

3問とも(c)の「た」が選択されることを予想して作成したものである。これらの問題に対する回答を

集計したところ、表1のような結果が出た。

表1 質問紙分析結果

「た」を選択した割合 (%)				
() 内は人数 (**p<.01, *p<.05)				
	CS	KS	カイ二乗検定	JS
問題1	52% (26)	74% (35)	5.240097663*	89% (71)
問題2	92% (46)	68% (32)	8.796872541**	100% (80)
問題3	62% (31)	89% (42)	9.740734723**	91% (73)

表1にあるように、JSは3問全てにおいてほぼ回答が一致しており、(c)の「た」が含まれた選択肢が選ばれた。これに対し、CS、KSは問題によって高い比率が見られるものの、JSのように3題そろって高い比率が並んではない。ここから日本語母語話者と日本語非母語話者とは時間軸が異なることが窺われた(研究課題1)。

そして、母語が異なるCS、KS間で相違があるかどうかを明らかにするために、カイ二乗検定を用いて分析を行った(表1)。その結果、3題すべてにおいて有意差が見られ、CS、KS間で異なりがあることが明らかになった。ここから、日本語非母語話者の母語により時間軸が異なることが窺われた(研究課題2)。

今回の調査対象者であるCS、KSは皆、日本の文系大学・大学院に在籍する日本語力が大変高い学生である。このことから、日本語の事態を把握することがいかに困難であり、乗り越えがたい壁であるかということが窺われる。

6. 今後の課題

母語により時間軸が異なることから、上・超級であっても母語を用いて事態把握を行っている可能性があると考えられる。今後は時間軸、テンス・アスペクト体系を言語類型論的に見ることで、日本語の主観的といわれる時間軸を体系的に明らかにする必要があると考える。

参考文献

- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』 講談社
 ——— (2003-04) 「言語における<主観性>と<主観性>の指標(1)(2)』 『認知言語学論考』 No.3, No.4
 ——— (2006) 「<主観的把握>とは何か—日本語話者における(好まれる言い回し)—」 『月刊言語』 35, 20-27 大修館書店
 伊藤英人 (1990) 「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について(1)—敬体形について—」 『朝鮮学報』 137, 1-53 朝鮮学会
 井上優 (2001a) 「中国語・韓国語との比較から見た日本語のテンス・アスペクト」 『月刊言語』 364, 26-31 大修館書店
 ——— (2001b) 「日本語研究と対照研究」 『日本語文法』 1, 53-69
 尾上圭介 (1982) 「現代語のテンスとアスペクト」 『日本語学』 1, 2, 17-29
 塚本秀樹 (1990) 「日朝対照研究と日本語教育」 『日本語教育』 72, 68-79
 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』 くろしお出版
 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』 ひつじ書房
 ——— (2006) 『話者の視点がつくる日本語』 ひつじ書房